

サスペンス特集

『嘘をもうひとつだけ』

東野 圭吾 (講談社)



「小説というの一つ一つの話のボリュームが多そうで手を出しづらい。」「そういった人達はこの本を読んでみて下さい。」

この本は、東京都練馬警察署の刑事である加賀が、管轄で起きた不審な殺人事件の謎を解いていく物語です。この本の筆者の傾向とも言えるが、人の内面の描写に力を入れて書かれている。遺族や犯人の心情に目を向けて読むのも良いでしょう。

最初にボリュームの話をしました、この本はそんな心配は要りません。これは内容が五つに分かれていて、加賀を主役に書いてありますが、出てくる事件自体は全て異なります。

どの話も真相が分かりにくく、歯ごたえのある話です。しかしそれでも飽きることがあれば、切りの良いところで返却してさっさと次の本を借りる事です。

『やまよう刃』

東野 圭吾 (角川書店)



この本はサスペンス小説で、長峰の一人娘・絵摩の死体が荒川から発見され、それは未成年の少年グループによって蹂躪された末の遺棄だった。それを知った長峰は、突き動かされるように娘の復讐に乗り出す。正義とは何か。誰が犯人を裁くのか。世論を巻き込み予想外の結末を迎える重く哀しいテーマに挑んだ、心を揺さぶる傑作長編である。序盤や中盤で生まれてくる謎や、人物の不思議な言動を巧みに終盤で解き明かす。私はこれまでに何冊ものサスペンス小説を読んで

きたが、こういうストーリー展開は初めてで、最初読んだ時は衝撃を受けた。東野圭吾の作品の魅力は読まなければわからないので、ぜひ読んでもらいたい。

『ボトルネック』

米澤 穂信 (新潮社)



この小説は、主人公が亡くなった恋人を追悼するために東尋坊を訪れますが、そこで何かに誘われるようにして恋人と同じように崖から転落します。気が付くと地元の金沢にいて、そこは自分が知っていた世界と微妙に違っていた、というふうに話が始まります。これはパラレルワールドを題材としたものです。ポイント、最後の後味の悪さ。暗くて重い部分です。

深い意味を持つている作品ですが、そこに気が付かないと訳がわからなく、ラストの展開に納得いかないかもしれせん。しかし、そこを考察すると色々と見えてくるものがあります。読者が探偵のようになって答えを探していくのもポイントの一つです。皆さんそれぞれの答え

をぜひ見つけてください。

『白夜行』

東野 圭吾 (集英社)



1973年、大阪の廃墟ビルで、一人の質屋が殺された。容疑者は次々に浮かぶが、結局、事件は迷宮入りしてしまう。被害者の息子、桐原亮司、「容疑者」の娘、西本雪穂―暗い眼をした少年と美しい少女は、その後全く別々の道を歩んでいく。二人の周囲に見え隠れする、いくつもの恐るべき犯罪。だが、なにも「証拠」はない。そして19年…。息詰まる精緻な構成と、叙事詩的スケール。心を失った人間の悲劇を描く、サスペンス長編！

この本は心理描写のなさに物足りなさを感じるが、心理描写がないことで、彼らが何を考えてこういう人生を歩んできたのか読者の想像にゆだねられてしまう。そのため、読みようによつてはいくらでも深みにはまれる。逆に文章だけ読んでいても何も味わえないので、読者を試すような小説であり、何度も読みたくなる本です。